

地域と連携したキャリア教育プログラムにおける高校生の学びと学習を架橋する活動に関する研究

Research on learning-bridging and learning of high school students in a career education program in corporation with the community

荒木 淳子 高橋 薫 佐藤 朝美

Junko ARAKI Kaoru TAKAHASHI Tomomi SATO

産業能率大学 早稲田大学 愛知淑徳大学

SANNO University, WASEDA University, Aichi Shukutoku University

〈あらまし〉本研究では高等学校普通科のキャリア教育について、地域と連携した体験的学習プログラムにおける生徒の学びを明らかにする。その上で、地域と連携した体験的学習プログラムにおいて、生徒が地域での経験と学校での教科学習とを架橋（ラーニング・ブリッジング）し、自己の将来と結びつけて振り返るための活動を開発しその評価を行う。

〈キーワード〉 高等学校 キャリア教育 ラーニング・ブリッジング ナラティブ

1. はじめに

2011年中央教育審議会は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」という答申のなかで、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、幼児期の教育から高等教育に至るまでの体系的なキャリア教育を提言している。文部科学省高等学校教育部もまた2012年に、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」とともに、「社会・職業への円滑な移行に必要な力」や「社会の一員として参画し貢献する意識などの市民性」を高等学校で生徒に最低限習得させるべき「コア」の内容と定め、キャリア教育の重要性を指摘している。コアの力は生徒の進路・キャリア選択にとって重要であるだけでなく、大学で主体的・能動的に学ぶために必要な力としても重要視され、キャリア教育と高大接続両方の観点から、高等学校までの教育で修得すべき力と考えられている。OECDの調査では日本の高校生は教科学習への自信や自分の将来のために教科学習をがんばろうとする気持ちが海外と比べて低く（国立教育政策研究所2010）、今後は高校生が教科学習を自らの将来や社会と結びつけて考えるための幅広いキャリア教育が求められる。

2012年に国立教育政策研究所が行った調査では、80.4%の高等学校にキャリア教育の年間指導計画があり、うち約8割が学級活動・ホームルー

ム活動や総合的な学習の時間におけるキャリア教育を計画していた。特に、インターンシップや社会人の講話等の体験的学習は多くの高等学校で実施されている。実際に高等学校普通科に行った調査では、ホームルーム活動や総合的な学習でのキャリア教育に関する時間の多い学校は、時間の少ない学校に比べ生徒の汎用的技能がいずれも高く（長田・清川・翁長2017）、体験的な学習プログラムは生徒の学習意欲や汎用的技能を高めるといえる。

しかし高等学校の普通科は、専門学科や総合学科に比べてキャリア教育における体験的学習の実施や計画の割合は低い。一般に大学への進学を目指す生徒の多い普通科では、キャリア教育の内容も大学選択や進路選択に絞られがちである。大学での学びが変わる中、高大接続の観点から見ても高等学校普通科には、進路指導に留まらない幅広い体験的学習や、そこでの経験を日々の教科学習や自分の将来や社会と広く関連づけて考えられるようなキャリア教育が求められる。

2. 研究の目的

本研究では、高等学校普通科における地域と連携したキャリア教育プログラムについて、生徒の経験と学びを明らかにする。その上で生徒が地域での経験から得た学びを日常の教科学習と架橋し、自らの将来の進路や社会と結びつけるためのプログラムを開発し評価を行う。

初等・中等学校のキャリア教育では、2008年

に経済産業省が地域や企業と学校を結び付けてキャリア教育を実施する「キャリア教育コーディネーター」を認定するなど、地域と連携した活動に力が入れている。高等学校の普通科においても体験的学習としてインターンシップや社会人の講話にとどまらず、生徒たちが地域の人々と交流しながら地域課題の解決に取り組む学習が行われている。大学における学生の能動的な学びやサービス・ラーニング、PBL (Problem/Project based learning) の実践については研究が進み、地域での活動が学生の市民性獲得や深い学びにつながる事が明らかとなっている(木村・河井2012)。しかし、地域と連携した体験的学習プログラムにおける高校生の学びに関する研究はまだ少ない。高大接続の観点からも、高等学校における地域と連携した体験的学習が生徒の汎用的技能や将来への意識にどのような影響を与えるかについて明らかにする必要がある。

また本研究では、地域と連携した体験的学習について、生徒が地域での体験を日常の教科学習や自分の将来と結びつけて考えることができるような支援プログラムを開発し、評価する。大学におけるサービス・ラーニングの研究では、授業外での学習と授業での学習を架橋(ラーニング・ブリッジング)することが、学生の学びと成長にとって重要であることが指摘されている(河井・溝上2011; 河井・木村2013)。地域で行う体験的学習の経験について、日々の教科学習や自分の将来の進路と結びつけて振り返ることが生徒のより高い学習意欲や深い学びにつながると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 体験的学習における学びに関する研究

本研究では高等学校普通科で行われている地域と連携した体験的学習プログラムを事例とし、そこでの生徒の体験と学びについて分析を行う。2018年6月に岡山県立A高等学校に行ったヒアリングでは、生徒たちが外部講師の協力を仰ぎながら地域の企業にインタビューし、その内容を動画にまとめる活動を行っていた。本研究では高校時代に地域での体験的学習を経験した大学生に対して半構造化インタビューを実施し、地域での活動体験が大学での学びや進路意識にどのように影響したかについて分析を行う。

(2) 学習の架橋を促す活動の開発と評価

また本研究では(1)をもとに、生徒が地域での体験について、日常の教科学習や自らの将来と結びつけて振り返るための学習プログラムを開発し、評価を行う。総合的学習の時間などに地域と連携して行う体験的学習は、学校での教科学習を社会の諸課題と結びつけた真正な学習とする可能性を有している。岡山県立A高等学校の地域と連携した体験的学習プログラムにおいて、事後に地域での体験を教科学習や自分の将来と結びつけて振り返るためのワークシートと活動を設計し、こうした活動を実施した場合としなかった場合とで、生徒の日常の学習意欲や進路選択意識に違いがあるかを比較する。

振り返りにはナラティブに着目し、デジタルストーリーテリング(DST)など高校生と大学生が共同で体験を振り返って語る活動をデザインする。佐藤ら(2013)は、「経験の意味づけ」を行う活動にはDSTが適していることを指摘しており、荒木・佐藤(2018)では、子育て期女性が仕事と家庭という異なる二つの領域を架橋するための支援活動として、DSTが有効であることを見出している。本研究では高校生が身近なモデルである大学生と共同で振り返りを行うことで、地域での経験を教科学習や自らの将来と結びつけて考えることができるのではないかと考える。

4. 考察と今後の課題

本研究は岡山県立A高等学校普通科を事例とするものであり、研究で得られた知見を一般化するためには、今後は都市部など他地域の高等学校についても研究を行う必要がある。また地域と連携した体験的学習だけでなく、その他のキャリア教育プログラムについても見ていく必要がある。

謝辞

本研究はJSPS 科研費JP17K01150の助成を受けたものです。

主な参考文献

- 荒木淳子・佐藤朝美(2018)子育て期の働く女性のキャリア支援を目的としたデジタルストーリーテリング・ワークショップの開発と評価。日本教育工学会論文誌第41(Suppl.), 109-112.
- 河井亨・木村充(2013)サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割。日本教育工学会論文誌, 36(4), 419-428
- 国立教育政策研究所(2010)キャリア教育のススメ。東京書籍, 東京